

令和 4 年 6 月 27 日現在

機関番号：32687

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2021

課題番号：16K04335

研究課題名（和文）子どもの妊娠から成人までの長期縦断研究から見る親子の発達

研究課題名（英文）Longitudinal investigation of parent development from pregnancy to early adulthood

研究代表者

岡本 依子 (Okamoto, Yoriko)

立正大学・社会福祉学部・教授

研究者番号：00315730

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、妊娠、出産を経て、子育てを通して成人するまでのプロセスで展開する子どもと親の発達について、生涯発達および家族のダイナミクスの視点から捉えることが目的である。乳児期の親子コミュニケーションにおける代弁と返答については日米の相違がみられた。20歳時点での親子双方のインタビューの結果、子どもの成長に伴って自分（親）にはどうにもできない存在として子どもを再認識というプロセスや、子どもにとっての葛藤の場が家族から外の世界へと移行していたことが示唆された。また、SCT質問紙を用いて子ども観や母親観、父親観を検討した結果、子ども観は「元気」「育つ」、父親観は「家」「守る」という語に特徴的であった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義としては、生涯発達の視点から、妊娠期、乳幼児期、児童期を経て、成人期にわたる親子の発達や子育て観の変遷を捉えようとする研究は少なく、子育て完了期における子育ての振り返り、また、家族ダイナミクスの観点から親と子のラ人生における葛藤の捉え方の一致を検討できたことは意義があるといえる。さらに、その背景にある子ども観や母親観、父親観についての示唆も意義がある。加えて、社会的意義としても、子育ての困難さへの対処への示唆が得られたのではないだろうか。

研究成果の概要（英文）：This study aims to explore the development of children and their parents from pregnancy through infancy, childhood, and adulthood. This process is a child-rearing process for the parents and an acculturation process for the children viewed from the perspective of lifespan development and family dynamics. Parental Proxy Talk and Answer-like Talk by a Japanese and an American mother was showed in culturally different contexts. The results of the interviews at the age of 20 years suggested that as the children grew older, there was a process where a parent recognizes her child as an existence that she had no control over, and that conflicts for a child shifted from the family to the outside world. In addition, the SCT questionnaire was used to examine the imagines of children, fathers, and mothers, and we found that the imagines of child were characterized by the words; “cheer” and “grow-up,” while the imagines of fathers were characterized by the words; “home” and “protect.”

研究分野：発達心理学

キーワード：縦断研究 親子コミュニケーション 親子の発達 子ども観 親子の葛藤

### 1. 研究開始当初の背景

本研究は、子どもを妊娠し、子どもが生まれ、子育てを通して、その子どもが成人するまでのプロセスで展開する子どもと親の発達について、生涯発達および家族のダイナミクスの視点から捉えることが目的である。これまで科学研究費補助金（平成 12-13 年度、14-16 年度、17-19 年度、および、23-25 年度）の支援を得て実施および分析を進めてきた国内 40 家庭の縦断研究（妊娠期から小学校入学まで）と同じ協力家庭に対して、今回の科学研究費補助金によって、子どもが 20 歳になる時点での追加調査を計画した。これまでの妊娠期、乳幼児期、児童期のデータに、新たに子育て完了期といえる成人期のデータを加え、親子の発達や子育て観について生涯発達の視点から分析を計画した。

### 2. 研究の目的

親とは、子どもとのやり取りを経て、親自身も発達して親となる。本研究は、親が子どもを育て、子どもが発達するという道筋だけでなく、子どもが育ち、親となる準備をする道筋を含むものである。このような視点から、本研究は、親への移行に関する研究（Koivunen, Rothaupt & Wolfgram, 2009; Katz-Wise, Priess, & Hyde, 2010 など）を起点としつつ、子どもの誕生後数年の移行期のみを対象とするのではなく、子どもが育って巣立ってゆくまでの生涯発達の視点から親の発達に着目する。また、同時に、子どもが育てられた側面だけでなく、子どもが親を育てる側面にも着目する。

ところで、親と子どもの発達には社会的側面と個人的側面が同時並行的に影響しており、子育てとは、親自身が育ててきたプロセスにおいて内化した文化的意味を、子育て実践を通して外化する営みと言い換えることができる。文化的意味の外化と内化のプロセスは同時に生じる（Valsiner, 2007; Hermans & Hermans-Konopka, 2010）が、子どもが当該文化に“染まる”ことではなく、新たな意味を見だし自分のものとする専有（Wertsch, 1996）のプロセスである。つまり、ズレを含む継承といえる。本研究では、子どもの発達を、子育てを媒介とした文化化と捉え、親子の整合性とズレの実際についても明らかにしたい。

#### (1) 乳児期のコミュニケーション（Okamoto, 2017）

乳児期の親子コミュニケーションにおける代弁とは、前言語期の乳児の思考や感情を乳児の視点から表す親の発話である（岡本, 2015 他）。ここでは、前言語期の親子コミュニケーションを明らかにするために、代弁に加えて“返答のような発話”についても分析対象とし、アメリカの親子のデータとの対比で検討する。

#### (2) “二十歳になるまで”を振り返った親子の語り（菅野・岡本・亀井・東海林, 2018）

協力家庭の子どもが成人を迎えるのを機に、子育て完了期における親子の長期的な発達を検討するために、再度研究への協力を依頼した。まずは、20 歳時点におけるインタビューで語られた「難しかった時期」「大変だった時期」についての語りに注目し、1 ケースの親子を取り上げ、母親の語りを中心に検討する。また、「難しかった」「大変だった」と語られた時期に親子の間でズレがあるのかについて検討した。

#### (3) 子の語りに現れる家族外コミュニティの位置づけ（亀井・菅野・東海林・岡本, 2018）

20 歳という年齢は発達心理学的には思春期を乗り越え、家族と新たな関係性を培い、より大きな社会的文脈へと自己を位置づけていく年齢といえる。ここでは 20 歳になる研究協力者に対して、それまでの困難や成長について問うインタビューを行い、その回答から家族外コミュニティにおける活動およびそこでの関係性が本人によってどのように位置づけられているのか整理し、さらにこれらの活動についての親がどのように位置づけているのかを合わせて検討する。ここでは、インタビューを行った親子のなかから 1 ケースの親子を対象とした。

#### (4) 20 歳時点での親子の子ども観と親観（岡本・東海林・菅野・亀井, 2020）

子どもが 20 歳時点での、親および子ども双方が抱く子どもや親、親子、夫婦に対する捉え方や意味づけについて検討する。親は、目先の子どもと向き合い、対峙しながら「今ここ」においてのみ子育てをするだけでなく、自身の子どもの観や親観といった捉え方や意味づけを参照しながら、子育てを行う。さらに、親のもつ捉え方は、実際の子育てを通して変化する。子どもにとっても、自身が育てられてきた経験や両親のやりとりに触れることを通して子ども観、親観、夫婦観や親子観を発達させる。その意味で、親や子どもが抱く捉え方や意味づけは、社会歴史的に構築されるものである。

子ども観、親観、親子観、および、夫婦観は、親にとっては子育ての道具であると同時に結果であり、かつ、それらの連鎖である。子どもにとっては親準備性の根幹をなすものといえるだろう。長期縦断プロジェクトでは、子どもや親、親子、夫婦に対する意味づけを子ども観、親観、夫婦観、および、親子観として、文章完成法（SCT）質問紙を実施してきた。ここでは、20 歳時点での親および子どもの SCT 質問紙法により子ども、父親、および、母親の子どもや親の捉え方について検討する。

### 3. 研究の方法

調査協力家庭：妊娠期から児童期までのプロジェクトに協力していた 41 家庭のすでに収集され

ているデータについて親子コミュニケーションの観点から分析を行う。また、このプロジェクトに参加した家庭のうち、17 家庭から調査協力の承諾を得た。これまでの調査においてすでにラポールが形成されており、今回は、研究者が親と子を別々に、各家庭または指定場所を訪問して調査を行った。なお、調査に先立って、立正大学研究倫理委員会の承認を受け、研究協力者には調査の概要等について個別に説明し、承諾を得ている。

調査時期：2017 年 7 月から 2018 年 1 月

調査場所：協力者の家庭もしくは指定の場所

調査内容：親子それぞれへのインタビュー、親子のコミュニケーション場面の撮影、質問紙を行った。インタビューに先立ち、誕生から現在までを記入できるようにした年表を提示し、それぞれの時期で印象に残っていることを記入してもらった。そのあと年表を見ながら、よかった時期、大変だった時期、難しかった時期などを尋ねた。インタビューでは、「よかった時期」「大変だった時期」「難しかった時期」「親子の関係が変わったと思う時期」「自分が成長(変化)したと思う時期」「親が成長(変化)したと思う時期」を尋ねた。また、「20歳を迎えて感じること」「自分の将来について」「両親の将来について」も質問を行った。さらに、質問紙は、子ども観、親観、夫婦観、および、親子観を尋ねる文章完成法(SCT)質問紙であった。

(1)乳児期のデータを対象とする。米国での1組の親子のデータと対比するため、家庭の条件が類似した1組を本研究から抽出した。それぞれの親子の観察データからトランスクリプションを作成し、代弁および返答(子どもからの質問がなくても返答として発せられた発話)を月齢ごとに検討した。

(2)佐伯さん(仮名)親子における、年表をみながらのインタビューにおいて、「難しかった時期」「大変だった時期」についての語りを取り上げる。佐伯さん親子に着目した理由は、研究分担者(2)の分析担当者が調査を担当していたことと、これまでの乳幼児期等の調査時と印象が大きく変わり、ふっきれ感を感じたからである。母親の語りを中心に検討したうえで、それに対応する「難しかった」「大変だった」と語られた時期に、親子の間でズレがあるのかについて検討した。

(3)1組の親子を対象としてインタビューで語られたエピソードを検討した。分析対象となったA(大学生)とその母親は、研究協力者(3)の分析担当者が子どもにインタビューを行った親子のなかから比較的発話量が多かったからである。Aに対しては当該分析担当者が、母親については研究代表者がそれぞれ2時間ほどのインタビューを行った。

ここでは年表を見ながら聞いた「よかった時期」「大変だった時期」「難しかった時期」「親子の関係が変わったと思う時期」「自分が成長(変化)したと思う時期」についての回答の中で登場した家族以外の活動の場(学校、部活、etc)を家族外のコミュニティとして抽出し、活動や関係性に対する感情的側面、自己に関する言及、家族や他者との関係に焦点づけてエピソードを整理した。

(4)長期縦断プロジェクトにすでに協力しており、20歳時点での調査依頼に応じた世帯のうち、子ども、母親、父親の三者からのSCT質問紙の回答が得られた2世帯6名のデータを対象とする。子どもはいずれも男性であった。SCTは、東海林(2008)や青木(2008)において用いられたものとの共通性を重視して、「子ども」「母親」「父親」「夫婦」「親子」という5つの語幹に対して、「とは・は・が・を・に」の助詞を選び文章を完成させるものである。同じ語幹に対して複数の文の完成させることによって、語幹から得られる捉え方や意味づけの多様性に迫る。今回は、各語幹3つ以上を目安に文章を完成させるよう依頼した。得られた95の文章をテキスト入力し、解析ソフトウェアR3.6.1(R Core Team, 2019)上で、MeCab(石田, 2017)を用いて内容分析を行った。また、そこから得られた語にもとづきカテゴリーを作成して、記入者(3)、語幹(5)、および、内容(28)について、コレスポネンス分析(SPSSver26, 非線形型正準相関分析)で語幹との関連性を検討した。

#### 4. 研究成果

(1)日本の親子1組と米国の親子1組の親子コミュニケーションにおける50発話中の代弁(Parental Proxy Talk; PPT)と返答(Parental Answer-like Talk; PAT)の頻度はTable 1.の通りである。日本の親子も米国の

親子も類似した文脈において代弁および返答が用いられていた一方で、異なる文脈も見出された。とくに、日本の親は子どもの達成場面において、「できた」などの代弁を用いるが、米国の親は“You did it”のように非代弁であった。また、返答については、期待された間(Hermans & Hermans-Konopka, 2010)としての機能が示された。米国の親子の返答の頻度が高いことと、前言語期の乳児を早くから独立した対話の相手として捉えていることが推測された。

(2)分析対象となった佐伯さん親子の年表はTable 2.のとおりである。幼稚園と転校前の小学校については母子ともに難しかった大変だったと答えていたが、それ以外は一致しなかった。

Table 1. PPT and PAT in 50 utterances of mothers

observational session		3/4mo	6mo	9mo	12mo
Japanese	PPT	14	15	17	16
Infant	PAT	8	3	3	3
American	PPT	5	11	16	12
Infant	PAT	4	6	5	10



「大変さ」や「難しさ」をどのように語るのかに注目して検討した。語り方には、語り手の構えや、世界に対する向かい方があらわれている（森, 2010）と考えたからである。佐伯さんは、いずれの時期でも「大変さ」「難しさ」を

	母の記述	子の記述
1997年	誕生	誕生
1999年	妹誕生。3年保育の幼稚園に入園（お受験幼稚園）	
2004年	S小学校入学	S小学校入学
2008年	自宅転居。I小学校転校 中学受験	I小学校転校 中学受験不合格
2010年	I中学入学。放送情報部入部。 高校受験で理系・文系の選択を迫られ、理系を選択。	I中学入学
2013年	T大学付属高校に入学	T大付属高校入学
2015年	高校卒業。1年目の受験は情報での進学をやめて失敗。 文系に転向。	大学入試不合格
2019年	文系で国立・私立大に合格するが入学せず働くことを前提に情報処理資格を目指して勉強を始める。	予備校入学 大学進学せず 情報処理の試験勉強

Table 2. 親子の年表

\* 青いセルは難しかった・大変だった時期、オレンジはよかった時期

子どもの問題というよりも、「たまたま」めぐりあった周囲の環境によるものとしていた。ところが、高校に入って本人との意思疎通の難しさが語られるようになる。高校に入ってから感じられた「本人との意思疎通」の難しさという大変さは単純に「周りの問題」に還元できないものであり、今までの説明様式が破綻している可能性が考えられる。

また、子ども本人が大変だったと語った大学受験の2年間を佐伯さん(母)は大変だった時期としては語らず、親子の関係が変わった時期として語っていた。「周りの問題」というそれまでの説明様式が使えなくなることで、本人に向き合わざるを得なくなり、さらに「大学に行かない」という本人の強い意思に直面して、今まで抱えていた責任を手放したのではないかと考えた。

さらに、乳幼児期の調査において、佐伯さんが子育ての難しさや大変さをどのように語っていたのか、「子どもをイヤになること」についての語りを参照した。佐伯さんはイヤになることを「受け入れたいが条件的に難しい」と語ることが多かった。大変さを「環境のせい」とする今回の語りとの類似性が伺える。今回の調査において、説明様式の破綻 子どもと対峙せざるを得なくなる 自分(親)にはどうにもできない存在として子どもを再認識というプロセスが示唆され、このことが、再会時にインタビューーが感じた“ふっきれ感”として感じられたのではないだろうか。すなわち、子どもは親の思いとは裏腹に“勝手に”育っているという現実を、この事例はよく表していたといえるだろう。

(3) 分析視点からAによって語られた主な家族外コミュニティおよび母親のそれに対する語りをインタビューの時系列により抜粋したものがTable 3.である。

	子の記述	母親の記述
1997年	誕生	誕生
1999年		保育園に入園するが毎日泣いて退園。3年保育で幼稚園。
2004年	小学校入学時電車とバス通学だったので周りの迷惑や配慮を考えず学校で起こられていた事。周りの小学校の子どもたちとサッカー教室でよく遊んだこと	小学校の自由な校風の中人間形成する。
2008年	小学4年生の時に団体スポーツを始めたこと。最初はとても難しく自分に向けてないと思う時もあったが辞めずに続けてよかったと思う。	12歳) 父が病気になり、たくましくなったと思う。中学校選びも考えた時期。
2010年		14歳) 父が単身赴任になり、進路選択もTELでやりとりするも意見の違いがあった。私はAの様子わかるのでAに決めさせるように父親に伝える。
2013年	自ら中高一貫校への進学を辞退して団体スポーツの強いチームに入ったこと。初めて親に意見した。	希望の高校に入学し好きな部活を始める。自分で決めた事を認めてもらえる様弱音を言うこともなく両親でサポートするようになる。
2016年	大学入学したこと。今までよりもたくさんの人に出会い、様々な考えがあって面白い。	アメフト選手からスタッフへの変更の時は最後まで話した感じだがAの気持ちは決まっていたと思う。しんどいと思うが自分で決めた事を貫いていると思う。

Table 3. Aによって語らえた家族外コミュニティおよび母親の語り

主な家族外のコミュニティとして、小中/中高一貫校、団体スポーツ T のクラブチームや部活動、および、オーストラリアでのホームステイが挙げられた。そこから、子どもの未来像にとってどのようなコミュニティ(活動の場)を選択することが適切なのかという親子の展望の違いが大きな葛藤の原因になっていた。

中学時代までは A の葛藤の舞台は家族であったが、高校時代では部活内での自己の立場性が葛藤の対象にされ最終的にはよい時代として自己成長のストーリーの中で語られていた。自己を位置づける場が家族間から家族外のコミュニティに移行していると考えられる。

一方、よかった時期と成長した時期とともに小学校5年生のホームステイの体験が挙げられた。Aは「外の世界の衝撃がすごくて」「(それまでは)分からない子の気持ちがわからない。オーストラリアではわからないこともあり、無力さ、無知さを感じて、自分から友達に聞くっていうことが増えた」など当時を振り返り、自分の変化について語った。ホームステイ体験については母親にとっても成長の見られた時期として語られていた。

また、この時期の大きな出来事として、母親が年表に記述した父の入院などのエピソードはインタビュー中に A からまったく語られなかった。これに関しては A の当時の年齢などの理由が推測されるがより検討が必要である。親子の語りの焦点化の共通性と差異に注目することで、子が家族からより広い社会的文脈へ自己の立ち位置を移行する過程について理解する一助となるかもしれない。

(3)得られた文は 95 で、語幹の内訳は、「子ども」20、「母親」20、「父親」18、「夫婦」19、「親子」18 であり、父親を語幹とする文章より、子どもや母親の方が文章を想起しやすいのかもしれない。SCT において用いられた語は Figure 1. に、記入者や語幹、用いられた語についてコーディングを行い、コレスポネンス分析の結果を Figure 2. に示す。

語幹「母親」「父親」「夫婦」で「子ども」、語幹「子ども」で「親」や「母親」が用いられることが多かったことから、親と子の相互的な意味づけが見いだされた。また、語幹「子ども」において、「元気」「育つ」の意味付けがみられ、これは父親からの記入に特徴的であった。語幹「母親」においては、「くれる」「優しい」「いつも」という語との関連で意味づけられており、「子ども」に対して保護的なイメージだけでなく、安定した関係性がイメージされることが見いだされた。語幹「父親」においては、「家」や「守る」との関連で意味づけられている。また、父親記入の「家」も特徴的であった。

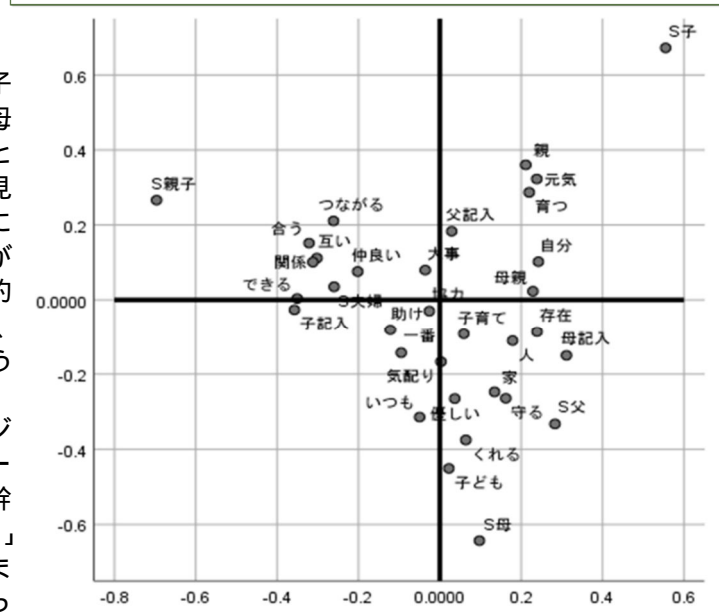
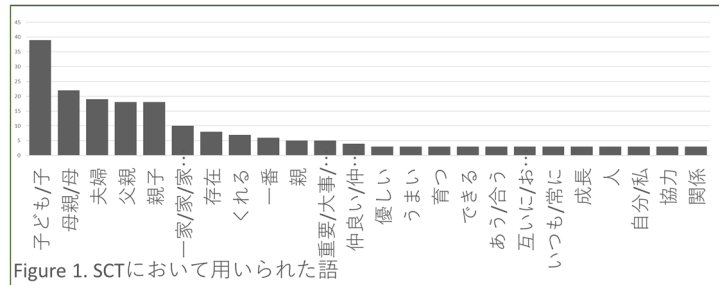


Figure 2. SCT の記入者、語幹、用いられた語の関連

#### <引用文献>

青木弥生(2008). 子どもイメージ、子育てイメージの役割. In 岡本依子・菅野幸恵(編著). 親と子の発達心理学 - 縦断研究法のエッセンス. 東京:新曜社.

Hermans, H.J. & Hermans-Jansen, E. (2003) Dialogical Processes and Development of the Self. In J. Valsiner and K.J. Connolly(Eds.), Handbook of Developmental Psychology(pp.534-559). London:Sage.

Hermans,H & Hermans-Konopka,A. (2010). Dialogical Self Theory. Cambridge:Cambridge.

石田基広 (2017). R によるテキストマイニング入門第 2 版. 森北出版.

亀井美弥子・菅野幸恵・東海林麗香・岡本依子. (2018) 子の語りに現れる家族外コミュニティの位置づけ: 子どもの妊娠から成人までの長期準団研究から見る親子の発達(2) 日本質的心理学第 15 回大会, No056.

Katz-Wise, S.L. , Priess, H.A., Hyde, J.S. (2010). Gender-Role Attitudes and Behavior Across the Transition to Parenthood. Developmental Psychology, 46(1), 18-28.

Koivunen,J.M., Rothaupt,J.W., & Wolfgram,S.M. (2009). Gender Dynamics and Role Adjustment During the Transition to Parenthood: Current Perspectives. The Family Journal, 17(4). 323-328.

岡本依子.(2015). 妊娠期から乳幼児期における親への移行: 親子のやりとりを通して発達する親. 新曜社

岡本依子・東海林麗香・菅野幸恵・亀井美弥子. (2020). 20 歳時点での親子の子ども観と親観 長期縦断研究から見る親子の発達(3) . 日本発達心理学会第 31 回大会, PS8-39.

R Core Team (2018). R: A language and environment for statistical computing. R Foundation for Statistical Computing, Vienna, Austria. <https://www.r-project.org/> (2019.10.)

Okamoto, Y. (2017).Cross-Cultural Analysis on Parental Proxy Talk and Answer-like Talk in Infant-Parent Communication. 18th European Conference in Developmental Psychology.

東海林麗香(2008). 子どもの誕生と夫婦関係の意味づけの変化. In 岡本依子・菅野幸恵(編著). 親と子の発達心理学 - 縦断研究法のエッセンス. 東京:新曜社.

菅野幸恵・岡本依子・亀井美弥子・東海林麗香. (2018) "二十歳になるまで" を振り返った親子の語り: 子どもの妊娠から成人までの長期縦断研究から見る親子の発達(1). 日本質的心理学第 15 回大会, No055.

Valsiner, J. (2007) Culture in Minds and Societies: Foundations of Cultural Psychology(pp.300-357). Los Angeles:Sage Publications.

Wertsch,J. (1991) Voices of the Mind-A Sociocultural Approach to Mediated Action. Cambridge, Mass: Harvard University Press.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 岡本依子・東海林麗香・菅野幸恵・亀井美弥子
2. 発表標題 20歳時点での親子の子ども観と親観 長期縦断研究から見る親子の発達(3)
3. 学会等名 日本発達心理学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 菅野幸恵・岡本依子・亀井美弥子・東海林麗香
2. 発表標題 "二十歳にあるまで"を振り返った親子の語り：子どもの妊娠から成人までの長期縦断研究から見る親子の発達（1）
3. 学会等名 日本質的心理学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 亀井美弥子・岡本依子・菅野幸恵・東海林麗香
2. 発表標題 子の語りに現れる家族外コミュニティの位置づけ："二十歳になるまで"を振り返って子どもが語る育ちの場
3. 学会等名 日本質的心理学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Okamoto, Yoriko
2. 発表標題 Cross-Cultural Analysis on Parental Proxy Talk and Answer-like Talk in Infant-Parent Communication.
3. 学会等名 18th European Conference in Developmental Psychology (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 岡本依子
2. 発表標題 可視化の道具としての代弁・不可視を維持するための代弁（RTの話題提供者；RT題目「発達における「不可視性」とその意義」）
3. 学会等名 日本発達心理学会第28回大会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	菅野 幸恵 (Sugano Yukie)  (50317608)	青山学院大学・コミュニティ人間科学部・教授  (42608)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	亀井 美弥子 (Kamei Miyako)	湘北短期大学	
研究協力者	東海林 麗香 (Shoji Reika)	山梨大学	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------